



「こんにちは 市長です」 8月1日号

家に帰るとだいたいテレビ、サスペンスドラマが好きだったけど最近飽き気味。久しぶりに「本でも読むか」という気になって本棚を見回す。「これ面白かった記憶がある」と陳舜臣の『阿片戦争』を全巻引っ張り出した。開いてみると、1ページに上下2段、小さい活字で敷き詰められている。読めたものではない。今、そんな本はまれだ。若かりし時「こんな本が読めたんだなあ」と感慨深い。ケースに入れ直して本棚に戻す。

横長の変形本が棚からはみ出していた。『年を歴た鰐の話』、山本夏彦氏が翻訳した本だ。初版は昭和16年、手元にあるのは平成15年に発行された物。15年前に買ったことになる。何でこの本を買ったのか全く分からない。右のページに物語があって左のページにはペン描きで鰐のその時々の様子が描かれている。

「年を歴た鰐は、長い間健康だったが、五、六十年このかた、ナイル河の湿気が体にこたへはじめたことに気がついた。まづ膝が痙攣しだしたし、續いて手を動かすたびに、肩がもがれるやうに感じだした（以下略）」。ナイル河にすむ魚たちは「オーイ。老いぼれがくるぞ」と鰐をあざけ笑った。岸に打ち上げられた魚の死骸しか食べられなかった。空腹ゆえに寝ている孫娘を食べてしまう。身も心もボコボコにされ、ついにそこから逃げ出した。海に出ると雌のタコと友達になる。新鮮な魚を取ってくれた。が、そのタコの足を1本ずつ食べ始めたのだ。足が終わると愛する彼女を丸ごと食べてしまう。ほんとにうまいと思った。けれど、食べ終わるや否や、苦い涙を流した。話はまだまだ続きますが、その結末はどうなるのでしょうか。ハッピーエンドはありませんよね。ところが…。

テレビのサスペンスもの以上に面白い本はたくさんある。今年の芥川賞作品『むらさきのスカートの子』（今村夏子著、朝日新聞出版）はいいですよ。